

令和 7 年 6 月 20 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2024

課題番号：18K11792

研究課題名（和文）ニューヨーク市におけるバングラデシュ出身の移民：移民二世代の生活実態調査

研究課題名（英文）Bangladeshi immigrants in New York City: Research on the living conditions of second-generation immigrants

研究代表者

鈴木 弥生 (SUZUKI, YAYOI)

立教大学・コミュニティ福祉学部・教授

研究者番号：80289751

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：移民第一世代は、東パキスタン時代のベンガル語公用語化運動とその根底にある母語、そして独立に至るまでの経緯に誇りをもっている。それは、移民第一世代のアイデンティティとも深く関係している。そのため、移住先でもベンガル語や伝統文化を子どもたちに継承しようとしている。また、ニューヨーク市においても相互扶助に基づいたコミュニティを形成して頻繁に情報交換を行っている。これに対して、移民二世代間の交流は必ずしもバングラデシュ出身者に限定されているわけではない。彼女・彼らは、保護者の意図や願いを理解しながらも、意思決定について、学校生活を通して形成される仲間の影響を受けている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ニューヨーク市は、多国籍企業や情報通信技術産業が集積するグローバル都市として変化を遂げてきた。それに伴い周辺部において労働需要が生み出され、移民が非正規労働者として働いている。従来の移民研究では労働者による送金やその影響が取り上げられてきたが、本研究は、移民の生活や労働実態そのものを明らかにしている点に社会的意義がある。

また、移民二世代の先行研究では、母語や文化の継承、世代間の相違に焦点があてられてきた。そこでは「仲間の影響」が見落とされてきたという指摘（Ali, 2023）がある。この分析視点に基づき、移民二世代の生活実態や意思決定に及ぼす要因を分析している点にも学術的意義がみられる。

研究成果の概要（英文）：The first Bangladeshi immigrants to New York City are proud of the language movement during the East Pakistan era, which was centered on their mother tongue. This movement, broadly recognized as linked to independence in 1971, is deeply connected to their identity. For this reason, from the beginning of their immigration to the US, they believed it was natural to transmit the Bengali, traditional culture, and religion to their children by themselves.

In addition, the first generation has a common tendency to form communities with other Bangladeshis who immigrated to the US, exchange information, and give each other mutual support. In contrast, interactions among second-generation immigrants are not necessarily limited to those of Bangladeshi origin. This paper examined the situation of making a decision in which children understand their parents' thoughts and wishes, yet are also influenced by conversations with their friends and peer effects at school.

研究分野：移民研究

キーワード：ニューヨーク市 移民労働者 移民第一世代 二世代 バングラデシュ イスラーム アメリカ合衆国 南アジア

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

バングラデシュでは広範囲において外国主導による援助・開発が推進されてきたが、2010年現在でも国民の約3割が絶対的貧困の状態にあり¹、貧困層を始めとする人々の雇用機会や賃金は低水準のままである。こうした背景から、単身で海外出稼ぎ労働(移民労働)に就いたり、家族構成員とともに海外移住を希望したりする人々が急増している。

移住先として関心が高まっているのはアメリカ合衆国(米国)である(Hassan 2008)。米国は、1995年、永住権取得のためのビザ発給者を抽選で選定するダイバシティ・ビザ・プログラムを導入している。この影響により、2012年には、バングラデシュ国内における労働力人口の8人に1人がこのカテゴリーでのビザ取得を目指してオンライン申請を行った。また、1995年以降、米国永住権を取得するバングラデシュ出身者は増加傾向にある。これに伴い、米国からバングラデシュへの送金額も増えている。それゆえ、先行研究では、移民労働者による送金が外貨獲得や家計に及ぼす影響についての分析が中心となっている。それに伴う移民第一世代の長時間労働の実態や移民第二世代の生活実態までは明らかにされていない。

2. 研究の目的

本研究は、グローバル化の進展に伴い重視されている移民研究のなかで「移民第二世代」に焦点をあてる。調査対象地域は、申請者が1997年から研究・調査を継続しているバングラデシュからの移民が増加傾向にある米国のニューヨーク市を選定している。具体的には、移民時の年齢、滞在年数、バングラデシュおよび米国での教育歴、労働実態、文化や慣習の違い、保護者(移民第一世代)の労働実態や家族構成員の生活実態、移民後の変化を明らかにする。そのうえで、バングラデシュからニューヨーク市への移住が、貧困問題の解決や本人および家族構成員のウェルビーイング向上に結びついているのか否かといった視点から分析する。

3. 研究の方法

(1) 2018年の夏季休暇中、ニューヨーク市に約2週間滞在して以下の調査を行った。マンハッタンの観光土産店、某フランチャイズ店、医薬品小売業店に勤務する移民第一世代を通して、労働実態のほか、第二世代の子どもたちの現状、保護者との関係等についての聞き取り調査、移民第二世代の大学生と大学院生から、学生生活や交友関係、言語のほか、宗教や文化に対する考え方について聞き取り調査、クイーンズのジャクソンハイツで、南アジア出身者が形成するコミュニティや商店街での実態調査(移民第二世代を含む)。この方々を通して2020年3月にもインタビュー調査を実施する予定であったが、新型コロナウイルスの蔓延により予定していたすべての調査を断念した。

(2) 続いて「国際共同研究加速基金 国際共同研究強化(B)『ニューヨーク市の移民労働者:新型コロナウイルス感染の影響についての国際共同研究』(研究代表者:鈴木弥生:2023年10月~2028年3月まで予定)の採択により、海外共同研究者、ロングアイランド大学ブルックリン校シャイード・アリ教授との連携を深めている。2024年度当該研究計画の推進でも述べたように、両研究課題には重複するところがある。

アリ教授は移民研究を専門とする社会学者であるが、折しも、アリ教授が移民第二世代の視点を通して著した新著(2023)が出版されたことから、2024年2月23日から3月9日までニューヨーク市に滞在して、共同研究者・佐藤一彦も含めてアリ教授との打ち合わせや研究会を2回実施している。また、コロンビア大学南アジア研究所副所長ウィリアム・カリック氏を訪問して、

¹ BBS(2024, p.541)によれば、絶対的貧困率は2016年度:24.3%、2022年度:18.7%に変化している。
Bangladesh Bureau of Statistics (BBS), June 2023, Bangladesh Statistical Yearbook of 2023.

バングラデシュ移民二世代の大学進学状況やコロンビア大学図書館の膨大な蔵書について教えていただいている。これらと並行して、バングラデシュ出身の移民第一世代から、労働実態のほか、第二世代にあたる子どもたちの状況について聞き取り調査を行っている。

(3) さらに、2024年9月中旬から研究休暇を活用してコロンビア大学の客員研究員としてニューヨーク市に滞在して研究・調査を継続している。この間、コロンビア大学で開催されている研究会に頻繁に参加して、複数の研究者を通して当該調査に関する助言や協力を得ている。

アリ教授、佐藤とは、先行研究の分析や共同執筆について研究会・打ち合わせを継続している。そこで、移民二世代に関する調査項目や調査方法についても助言を得ている。そのため、予定していた調査項目(上述参照)のほか、学校選択、クラブ選択、交友関係、宗教や伝統文化への考え方、バングラデシュへの帰国回数、ベンガル語の習得状況、バングラデシュの慣習や宗教に対する考え方、将来に向けての意向と意思決定に関する調査項目を追加している。すべての調査は了解が得られた方のみを対象として、研究の背景、経緯、目的等のほか、断る権利について十分な説明と配慮を行ったうえで実施している。なお、本調査の実施について、コロンビア大学ウィリアム・カリック氏(同上)、コロンビア大学芸術学部准教授ナニム・モハイメン氏、ニューヨーク市立大学社会学部講師トーマス・チュング氏に相談のうえ、具体的な助言や協力を得て実施している。

それと同時に、バングラデシュ出身の移民第一世代から、労働実態のほか第二世代にあたる子どもたちの就学状況、使用言語等について聞き取り調査を行っている。これら調査対象者の中には、2010年もしくは2012年からパネル調査を継続している人々が含まれる。そのため、家族構成員の変化や第二世代に当たる子どもたちがバングラデシュの伝統文化を継承しているのか否か、また、ベンガル語習得状況についても確認している。なお、現地治安のほか、バングラデシュ出身者の宗教や慣習にも配慮する必要があることから、すべての調査に佐藤が同行している。

(4) 翻訳作業

研究協力者の佐藤が中心となり、移民研究の先行研究と膨大なデータを移民二世代の視点を通して社会的科学的に分析したAli(2023)の翻訳作業及びアリ教授との研究会を継続している。

4. 研究の成果

(1) グローバル都市における移民労働者：先行研究

ニューヨーク市は、グローバル化の拡大とともに、多国籍企業、金融・不動産、情報・通信技術産業が集積するグローバル都市として変化を遂げてきた。それに伴い、都市周辺部ではさまざまな分野で労働需要が生み出されている(Sassen 2001)。また、バングラデシュ政府は、海外での雇用機会を求めることで国内の失業者や不安定失業者の存在を解消しようとする一方で、移民労働者による送金を外貨獲得の重要な柱にしている。これを反映するかのよう、先行研究の多くは海外からの送金が外貨獲得や家計に及ぼす影響に焦点をあて、経済成長への効果を高く評価している。これらの研究は、経済成長重視の視点から、また、国民経済や家計への貢献という側面から移民労働者の動向に光を当てるものである。しかし、グローバルな規模での労働力の動員、空間的な労働力の移動、そして、移民労働者の生活実態について全面的に明らかにするものではない。そのうえ、ニューヨーク市におけるバングラデシュ系二世代の現状は必ずしも明らかにされていない。そこで、インタビューに協力してくださった方々の回答を通してその概要を述べる(2025年5月現在)。

(2) バングラデシュ出身の移民第一世代

バングラデシュ出身の移民第一世代の大多数は、非正規労働者や日雇いの季節労働者として働いている。成人男性の前職業をみると、弁護士、政府職員、公務員、銀行員、会計士、

エンジニア、学校長、教師、空港職員、NGO 職員などが含まれている。成人女性の前職は、教師、エンジニアといった職種がみられるものの、バングラデシュで職業に就いたことがないという方が殆どであった。学歴をみると、男性は全員が少なくとも高等学校修了証を取得しており、そのほとんどが大学を卒業している。なかには、修士号を取得している人もみられる。女性もそのほとんどが高等学校修了証を取得しており、大学を卒業している人もみられた。バングラデシュの大学を卒業した人々は「授業は英語で行われた」と回答している。それを反映するかのようには、現在の仕事を行う以前から十分な英語力を習得しており、2010 年もしくは 2012 年から継続しているパネル調査をみても米国に移住してから英語力が向上したことは明らかである。

(3) 移民第二世代への影響

移民第一世代は、第二世代にあたる子どもたちに対して、母語、伝統文化、慣習、宗教、バングラデシュの歴史を伝達することに熱心である。というのも、インタビューに応じてくださった移民第一世代の大多数は、東パキスタン時代の言語公用語化運動がバングラデシュの独立につながったと認識しており、ベンガル語、伝統文化、独立への道のり、そして母国を誇りに思っているからである。そのため、全回答者は家庭内でベンガル語を使用している。これら移民第一世代の大多数は、移住後もバングラデシュの家族や親戚、家屋や屋敷地、耕作地、そしてコミュニティとのつながりを維持している。バングラデシュの家族や親族とも SNS を通して頻繁に連絡を取り合っており、そこでもベンガル語を使用している。こうした背景から、第二世代にあたる子どもたちはベンガル語での会話を十分に理解している。しかし、「小学校入学と同時に状況が変化している。ベンガル語よりも英語に親しむようになる」という回答が多くみられた。

専門職に就いていた人々の多くは、移住後も専門分野で働くことでより良い機会を得ようとしていたが、それを実現したのは 1 名のみであることがパネル調査を通して明らかになっている。そのため、移民第一世代は「アメリカで専門的なキャリアを築くためには米国の大学を卒業する必要がある」と認識している。そこで、彼女・彼らは、子どもたち、姉妹兄弟、姪や甥に対して米国での教育の必要性を伝えている。そこでは、大学進学、あるいは、少なくともコミュニティ・カレッジを卒業するよう奨励している。その結果として、殆どの子どもたちがそれを実現している。大学卒業後に現金収入を得ている第二世代の子どもたちは、その一部を保護者に渡している。女性・男性を問わず結婚後も家族とのつながりは強く、移住先での家族間での相互扶助関係は顕著である。

(4) 移民第二世代：先行研究

先行研究の多くは、移民第一世代にあたる親の影響を極めて重視している。例えば、母国のコミュニティ、家族や親族、言語、エスニシティ、伝統的慣習が継承されているのか否かについて焦点があてられてきた。また、移民の子どもたちに関して「学校、そしてその後の人生で善し悪しが分かれるのは、親の教育、収入、コミュニティに責任がある」とされてきた (Ali 2023,p.)。このような従来の先行研究に対して、Ali (ibid.) は、移民の母国と移住先の社会環境の相違の下で、移住先への同化・統合の問題提起として、「ピア・エフェクト」という視点が脱落してきたと指摘している。さらに、Ewing (2015)によれば「イスラームと文化を区別することは、多くの移民第二世代と第三世代にとって重要な役割を果たす」(ibid.p.203)。ユーイングは、この分析視点に基づき、米国とドイツでの調査を通してイスラーム系移民第二世代の現状を分析している。

(5) ニューヨーク市のバングラデシュ系第二世代

バングラデシュ出身の移民第一世代が共通の傾向を示していることに対して、バングラデシュ系第二世代には多様性がみられる。例えば、生まれた国・地域、米国に移住した年齢、移住後の年月等によっても状況は異なる。ここでは、暫定的に、保護者に同伴してバングラデシュから

米国に移住した子どもたちを移民第二世代、米国で生まれた子どもたちをバングラデシ・アメリカンと称しておく。米国では出生地主義をとってきたことから、先行研究をみても後者の子どもたちは移民第二世代というカテゴリーには属していない。

両者のあいだで異なるのは、使用言語のとらえ方である。まず、移住して5年以内の移民第二世代は、「英語は理解しているもののベンガル語の使用を好む」と回答している。また、「保護者とはベンガル語、妹とは英語で会話をしている」という移民第二世代もみられる。幼少期に家族とともに移住した移民第二世代及びバングラデシ・アメリカンの殆どは、「ベンガル語よりも英語に慣れ親しんでいる」と回答している。交友関係もそれぞれ異なるが、何れの場合も、彼女・彼らの交友関係は、必ずしもバングラデシ出身者のみに限定されているわけではない。意思決定についても、学校生活やクラブを通して得られる友人の影響を受けている。

また、バングラデシ系第二世代の中でもそれぞれの価値観や宗教観があり、姉妹兄弟のなかでも、使用言語のとらえ方、そして価値観や宗教観が異なる。宗教については、1名を除いて肯定的にとらえている。しかし、保護者が重きをおくバングラデシの伝統文化や慣習をすべて尊重しようとする第二世代は殆どみられなかった。とりわけ、帰宅時間、服装、結婚観に関して、保護者が抱き続ける伝統的な価値観とのあいだで葛藤を抱えている人もみられる。こうした現状について、第二世代の意思決定に着目する先行研究(上述)を分析視点として調査内容を分析している。なお、第二世代からの調査は単年度にとどまっていることから、2025年6月現在もアンケート及びインタビュー調査を継続している。また、移民第一世代同様、調査対象者の了解を得られる場合には長期的なパネル調査を継続する予定である。

(6) まとめ

バングラデシ出身の移民第一世代は、米国への移住と同時に、母国でのいわゆる中流階級からニューヨーク市の労働者階級へと下方階層移動しなければならなかった。それゆえ、非専門職の長時間労働といった厳しい労働条件に直面している。ニューヨーク市での10年以上に及ぶパネル調査を通して、その労働実態は殆ど改善されていないことが明らかになった。とりわけ母国で専門職に就いていた人々が、移住先での劣悪な労働条件を受け入れているわけではないことから、米国の移住が自身のウェルビーイング向上に結び付いているとみることは困難である。

しかしながら、第二世代の状況は異なる。調査の範囲内ではあるが、バングラデシ系第二世代の子どもたちは努力して高等教育にアクセスしている。グローバル都市への移住と現状に対して不満を抱いている移民第二世代は殆どみられなかった。こうした背景から、移民第一世代は、家族や子どもたちの将来を構築するための移住であったと認識するようになっている。バングラデシ系第二世代の子どもたちは、ニューヨーク市への移住を教育のためのより良い機会ととらえる傾向があり、ウェルビーイングを向上させる可能性を持つ。

引用文献 アルファベット順

Ali, Syed, and Chin, Margaret M., 2023, *The Peer Effect: How Your Peers Shape Who You Are and Who You Will Become*, New York University Press: New York.

Ewing, Katherine Pratt, 2015, "'Islam Is Not a Culture': Reshaping Muslim Publics for a Secular World" in Garnett, Jane and Hausner Sondra L. (eds.) *Migration, Diasporas and Citizenship*, Chapter 10, pp.202-225. Palgrave Macmillan: U.K.

Hassan, Munir, 2008, *Complementarity between International Migration and Trade: A Case Study of Bangladesh* in Andaleeb, Syed Saad (ed.) *The Bangladesh Economy: Diagnoses and Prescriptions*, University Press Limited: Dhaka, Chapter 3, pp.51-71.

Sassen, Saskia, 2001, *The Global City: New York, London, Tokyo*, Second Edition, Princeton University Press: Princeton and Oxford.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 3件/うちオープンアクセス 14件）

1. 著者名 Suzuki Yayoi and Sato Kazuhiko	4. 巻 27
2. 論文標題 The Significance of Bengali for Bangladeshis: How First-Generation Bangladeshi Immigrants Come to Terms with Their Situation in New York City	5. 発行年 2025年
3. 雑誌名 Bulletin of the College of Community and Human Services, Rikkyo (St. Paul's) University	6. 最初と最後の頁 69-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Suzuki Yayoi, Sato Kazuhiko, and Syed Ali	4. 巻 27
2. 論文標題 アリ・シャイード著「良い学校、悪い学校」を通してみる ニューヨーク市の学校選択 A System of School Choice Among Residents in New York City: Drawing on “good schools, bad schools” by Syed Ali	5. 発行年 2025年
3. 雑誌名 Bulletin of the College of Community and Human Services, Rikkyo (St. Paul's) University	6. 最初と最後の頁 155-168
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 Suzuki Yayoi, Sato Kazuhiko, and Duffill Paul William	4. 巻 26
2. 論文標題 A Study into Characteristics of Asian Immigrants in the United States of America : The Background and Interaction of Bangladeshi Immigrants in New York City	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Bulletin of the College of Community and Human Services, Rikkyo (St. Paul's) University	6. 最初と最後の頁 17-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/0002000432	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 鈴木 弥生	4. 巻 7
2. 論文標題 バングラデシュにおける社会開発とSDGs—現地NGOの子どものメイドへの識字・教育支援活動—	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Rikkyo ESD Journal, Research Center for Education for Sustainable Development, Rikkyo University	6. 最初と最後の頁 25～30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/00022748	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木弥生	4. 巻 16
2. 論文標題 「グローバルな視点から考えるコミュニティ福祉：Think globally act locally」（他シンポジスト：浅井春夫、沼沢秀雄、湯沢直美、司会：跡部千慧）『コミ福 25 周年 「いのちの尊厳」の視点でふりかえり、今後を展望する 』【シンポジウム録 分科会発表報告書 2022年度総会報告】	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 まなびあい	6. 最初と最後の頁 33-41, 61-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Suzuki Yayoi	4. 巻 25
2. 論文標題 The Spread of Disparities and Inequality due to the Coronavirus Disease 2019: The Conditions Faced by Essential Immigrant Workers in New York City	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Bulletin of the College of Community and Human Services, Rikkyo(Saint Paul 's) University	6. 最初と最後の頁 87-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/00022589	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木弥生	4. 巻 23号
2. 論文標題 アラブ首長国連邦におけるバングラデシュ出身女性の労働実態	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 立教大学ジェンダーフォーラム	6. 最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Suzuki Yayoi	4. 巻 9
2. 論文標題 The Less Known Side of the Beautiful Atolls in the Maldives; The Actual Working Conditions of Bangladeshi Migrant Labourers	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Journal of the Institute of Community and Human Services, Rikkyo University	6. 最初と最後の頁 77-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14992/00021175	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Ghamra Rifai and Suzuki Yayoi	4. 巻 14
2. 論文標題 Syria, what happened and why it happened : Once-beautiful ancient cities that were my homeland	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 まなびあい	6. 最初と最後の頁 184-197
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14992/00021225	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Suzuki Yayoi	4. 巻 8
2. 論文標題 A Study on the Background of Bangladeshi Migrant Labourers to the United Arab Emirates	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of the Institute of Community and Human Services, Rikkyo University	6. 最初と最後の頁 53-78.
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14992/00020238	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Suzuki Yayoi, Ritchie Zane, and Yamazaki Masaru	4. 巻 22号
2. 論文標題 Local People's Perspectives in Social Development; An Analysis of the Contents of a Collaborative Learning Class	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Bulletin of the College of Community and human Services, Rikkyo (St. Paul 's) University	6. 最初と最後の頁 53-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14992/00018975	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Suzuki Yayoi and Ritchie Zane	4. 巻 7号
2. 論文標題 A Study of the Living Conditions of Bangladeshi Women Migrants in New York City	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of the Institute of Community and Human Services, Rikyo University	6. 最初と最後の頁 35-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14992/00018535	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Suzuki Yayoi and Ritchie Zane	4. 巻 No.21.
2. 論文標題 An Analysis of a Course Taught in English on Local People's Perspectives in International Culture and Social Problems in the University-wide Liberal Arts Courses	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Bulletin of the College of Community and human Services, Rikkyo (St. Paul's) University	6. 最初と最後の頁 17-46
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14992/00017689	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鈴木弥生	4. 巻 11号
2. 論文標題 ニューヨーク市におけるバングラデシュ出身の移民労働者	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 まなびあい	6. 最初と最後の頁 160-179
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14992/00017060	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 鈴木弥生 (他シンポジスト、浅井春夫、沼澤秀雄、湯澤直美)
2. 発表標題 鈴木弥生「グローバルな視点から考えるコミュニティ福祉：Think globally act locally」、シンポジウム：共通論題『コミ福25周年「いのちの尊厳」の視点でふりかえり、今後を展望する』
3. 学会等名 立教大学コミュニティ福祉学会『まなびあい 第15回年次大会』(招待講演)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

「こんな研究をして世界を変えよう～大学の研究室を訪問してみた：鈴木弥生：ニューヨークに住むバングラデシュ移民の動向」『みらいぶっく 学問・大学なび』 (<https://miraibook.jp/researcher/k0482s>)。

「探求！ つながるテーマ」『みらいぶっく 学問・大学なび』河合塾 (<https://miraibook.jp/quest/detail/28>)。

「立教大学国際学術研究交流制度 2025年度『派遣研究員』報告書」 (https://www3.rikkyo.ac.jp/research/initiative/aid/interior/international/dispatch/results/25fy/_asset/pdf/dr_2504.pdf)。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	佐藤 一彦 (SATO KAZUHIKO)		専門的助言、研究会参加、現地調査、翻訳、研究代表者補助、コロンビア大学客員研究員(2024年10月~2025年9月)

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	ロングアイランド大学 ブルックリン	コロンビア大学 南アジア研究所	ニューヨーク市立大学 ハンター校